

美術科教育学会通信 52

2004年3月8日発行

事務 / 通信 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 美術学科 美術科教育学研究室 柴田和豊宛

Tel./042(329)7608 Fax./042(329)7599(柴田直通)

Tel./Fax.042(329)7594(相田直通)

E-Mail./kshibata@u-gakugei.ac.jp(柴田) /aidaman@u-gakugei.ac.jp(相田)

第26回 美術科教育学会 開催にあたって

広島大会テーマ 美術教育の今をみつめて
～実践と理論の統合～

美術科教育学会広島大会代表
若元澄男

「いまや遅しッ！広島は皆さんを待っている」と大見得を切りたいところである。が、いまだ準備万端というわけにはいかない。意味ある2日間を快適に過ごしていただきたいと、事務局の三根和浪と中村和世は、このところ不眠不休・東奔西走の体で踏ん張っている。当日倒れなければよいがと心配しつつも「開催大学代表某」は呑気に一切を任せている。それにしても春風そよぐ(はず)日本一のキャンパス(まとまったひとつのキャンパスとしては日本一。広島市民球場の104倍)に多くの学会員がみえてくださることを心より願いお待ち申し上げている。

閑話休題。今年の1月中旬のことである。教育学部第一類初等教育教員養成コース所属の男子学生が出張先の京都に携帯メールを送ってきた。すわ事件！では幸いにもなかった。いわく「若元先生は教育は教師によって変えることができるとお考えですか」との「唐突メール」。しかし、かの君は見所のあるユニークな学

生。ここはひとつ、と発奮したのが私。「打って一丸となることができればね」という類の返信。リアクションは「僕は文部官僚にならなければ駄目だと思うのですが...」であった。「まッ！それも一理あるかも」と私。「では、僕は今日から官僚になることを目指して勉強します。少年よ大志を抱けともいいますので」と彼。おい！おい！おい！と思いながら私、「教師になることをやめ官僚になることが大志だとは断じて思わない。が、もし貴君がそう考えるなら官僚などという半端なレベルでなく総理大臣を目指せ！」と送信。「ウッ！」がその返信。大方、こんなやりとりであったように記憶している。それ以後は音信不通。唐突メールがそのうちまたくるのかもしれない。「僕、総理大臣になりましたッ！」と。それにしても彼は、教師の限界をどこかで垣間見たのだろうか。なぜ、そんなことを突然に考えたのだろうか。若い教師にこそ望みを託している私には大いに心配な出来事であった。

ところで、「世の中」を善くも悪くも「変える」のは人だろう。その「人」を「つくり」あるいは「変える」のは環境ではないか。我々の立場で考えるなら教育環境ということになる。ではその教育環境を「つくり」「変える」のは誰か。未だに青い青い私はこれを教師と信じている。こう考えるからこそ私はいまも教師である。「教師」が「人」を、「人」が「世の中」を

という文脈なのである。

十有余年も前のことになる。あるポストの「お方」が「たとえば、文部官僚や教育課程審議会の委員になるような人が“美術好き”になるような美術教育を具体化していれば美術教育がいまのような憂き目に遭う事態には至らなかっただろう」と、一言。忘れられないブラックユーモアである。当時においても、「教師」と「人」と「世の中」の関係を前述のようにとらえていた私はこのコメントにすこぶる共感したので覚えている。

教育の要はやはり教師だろう。だからこそ、たとえわずかであったとしても、今回の学会参加を通して、美術教育への新たな視点や内容・方法転換の切っ掛けをつかんでいただけたらと願うのである。当然のことながら実践と理論を絡み合わせた視点からである。こうした願いを背景に、広島大会は、「非学会員・現職教員」に参加を呼びかけ「発表会場A」を構成した。「特別行事 ～ 」の内容もそれを基底においている。「特別行事 」は、画家岩下哲士氏、お母上、私の鼎談である。「美術・美術教育」を問い直すための素材にいただけたら本望である。「特別行事 」は、「美術と私」をテーマに解剖学者藤田尚男先生のご講演をいただくことになっている。こよなく美術を愛する科学者の立場から私達美術教育に携わる者に多くのご示唆をいただけることを信じている。「特別行事 」は、我々広島がというよりも、宮脇 理先生及び花篤 實先生が開催大学の意向を汲んでくださり流れにのせてくださったという方が妥当である。紙面を借り、お二人の先生にはあらためて感謝申し上げておきたい。（本記事は広島大会要項挨拶文から転用）

* * *

広島大会シンポジウムについて
「実践と理論の統合」をめぐって
～問題の浮上史とアーカイブ

広島大会事務局

広島大会の特別行事の三本柱の一つ、シンポジウムについてご案内致します。このシンポジウムは、上記のように題して行われます。学会元代表理事の宮脇 理先生、前代表理事の花篤 實先生、和歌山大の永守基樹先生、鳴門教育大の山木朝彦先生という論客をパネラーに迎え、美術教育の歴史をふまえた検討を行って頂く予定です。概要を次に転載します。

---「実践と理念の統合」という古典的テーマは、私たちにとって、未だプロブレマティックであるようだ。とりわけ教科教育学としての性格を中核とした「美術教育学」にとっては、その「学」と「知」のあり方を問いかけ続ける言葉であろう。

本シンポジウムにおいては、このテーマを美術教育の史的な潮流のなかに位置づけ、その時々々の浮上のあり方を探る対話を通して、美術教育学の今日の史的課題を見いだすことを企図している。このために、「学」としての美術教育の確立のために学会創設期から会の運営に携わった世代と、その時期に研究を始めた世代がパネラーとして集中討議する予定である。世代間の対話の中で、美術教育のアーカイブスが掘り起こされ、さらに多様な資料体がシンポジウムの場に想起されていく…。美術教育の「言葉」を生み出し、それを積み重ねていくことが美術教育という営為でもあり、同時にそれについての「学」を形成していく営為にも連なるものだ。そしてこれらの「言葉」への自覚が

理論と実践の不毛な対立を超えていくためには不可欠であろう。本シンポジウムにおいてフロアとともに生みだされる言葉が、場に集う者の絆へと広がること願っている。--- シンポジウムは、学会2日目の午後（総会の前）に開催されますが、奮ってご参加頂き、フロアからのご意見も頂戴したいと思っております。

なお、三重大学上山先生のお陰で、美術科教育学会 Website から広島大会 Website へのリンクが出来るようになっております。Yahoo 等の検索サイトで「美術科教育学会」と入力して頂ければ、学会公式 Website がヒットすると思しますので、そこから広島大会 Website へおいで下さり、詳細を併せご覧下さいませ。

* * *

改訂版学会誌CD-ROMのお届けについて

データベース構築部会
上山 浩(三重大学)

本学会通信に同封しまして改訂版学会誌 CD-ROM をお届けします。

この CD-ROM は、一昨年にお届けしました学会誌 CD-ROM の改訂版です。主な改訂箇所は、第 24 号の追加と、第 23 号に含まれる図版の著作権問題の解消です。先にお届けしました改訂前 CD-ROM は著作権処理上問題を含んでいます。この問題は既に処理しましたが、当該データを散逸させないことが著作権使用許諾の前提条件となっています。この件にご理解をいただ

き、当該 CD-ROM の取り扱いには十分にご注意いただきますようお願い申し上げます。なお改訂版では、第 24 号に限り、カラー図版を使用しています。

以下に、本 CD-ROM に集録した「readme」ファイルの抜粋(一部変更)を転載します。

この CD-ROM は美術科教育学会誌『美術教育学』の全バックナンバーを収録しています。

国立情報学研究所(旧学術情報センター)の電子図書館より提供を受けた画像データをもとに、データベース構築部会にて PDF ファイルとして作成しました。収録内容の著作権は全て美術科教育学会に帰属しますが、情報学研究所との取り決めにより、現在のところ、この CD-ROM の販売、コピーによる再配布、ネットワークに向けての配信などは禁止されています。美術科教育学会学会員のみがこの CD-ROM のデータを使用することができます。

収録ファイル

- ・学会誌第 1-24 号 : 01.pdf-24.pdf
- ・総目次 : index.pdf
- ・第 20-24 号データベース : db20-24.pdf
- ・この文書ファイル : readme.htm

コンピュータの設定により、.pdf や .htm の文字が現れなかったり環境設定ファイル等が現れることもあります。

使用環境

使用コンピュータは、MacOS・Windows を問いませんが、Acrobat3.0 以降のビューワーアプリケーションが利用可能な環境が必要です。

コンピュータには、PDF ビューワーがインストールされている必要があります。収録している PDF ファイルは、Acrobat3.0 (PDF1.2)まで遡って対応していますが、表示の美しさから最新版 Acrobat の使用をお勧めします。ただし、最新版の PDF ビューワーであっても、表示に乱れが生じる場合があります。

使用方法

各号のファイル(01.pdf など)をオープンするとその号の表紙が現れます。1 頁ず

つ閲覧することもできますし、目次頁からは論文等の冒頭頁へのジャンプもできます。

総目次(index.pdf)では、ビューワーの検索機能により、論文題・著者名から号数・頁数が検索できます。論文題をポイントすると該当論文にジャンプします。また、インデックスから該当号表示頁にジャンプします。

データベース(db20-24.pdf)も同様に検索対象にできます。論文題をポイントすると論文本文にジャンプします。

第23号(23.pdf)と第24号(24.pdf)は、テキスト入力されています。これらの号のみ論文全文を検索対象とできます。

プリント品質は400dpiに最適化してありますが、グレースケールおよびカラーの画像は72dpiの画質となっています。

おことわり

第23号と第24号については、学会誌の現物とは若干異なることがあります。また、異字体や旧字体なども正しく表示されない場合があります。さらに、環境によっては文字配置などに若干の乱れが生じることがあります。

論文等約610件、総頁数約6900を手作業にて操作しました。十分に注意しましたがページの傾き、表示位置等の乱れ、落丁(情報学研究所からのデータには落丁がありました)、総目次・データベースでの入力・リンクミス(目次と論文本体との表記が異なる場合は、原則として、論文本文に沿いました)等の危険性は排除できません。その他にも何らかの不都合ありました場合は、どうかご容赦頂きますようお願いいたします。利用法やその他のお問い合わせ、ご指摘、ご意見等がございましたら、下記までご連絡下さい。

E-mail:ueyama@edu.mie-u.ac.jp

* * *

平成15年度 科学研究費補助金採択課題 本学会関連 追加分

通信51号で、本年度の学会員による科研採択課題(研究代表者, テーマ, 配分金額)をお知らせいたしました。掲載漏れがありましたのでここで報告をいたします。(宇田)

< 基盤研究(C) > 新規分

降旗孝: 初等・中等教育一貫カリキュラムの実践的研究 - 造形美術教育における指導方法の改善、50万円

* * *

美術科教育学会第5回西地区会 < 研究発表会 in 奈良 > 報告

テーマ: 25年を経た「造形遊び」の功罪
- < 新たに切り拓いた道 > と < 巻き起こした混乱・誤謬 > -

宇田秀士(奈良教育大学)

平成15(2003)年12月20日(土)午後12時30分から、17時30分まで、奈良教育大学附属教育実践総合センター多目的ホールにおいて、第5回西地区会を開催した。当日は、寒波による交通事情の悪い中、関係者を含め、約100名の参加者で、発表会と討議会をもった。なお、この会は、参加費のほか、学会地区会補助費、学会授業研究部会補助費(宇田が同部会部会員のた

め)、協賛団体・企業支援費をうけて運営した。

花篤實氏(西地区会統括理事)の挨拶の後、「造形遊び」の歴史と教育現場の意識」として、4人の発表をもった。まず、宇田が、「造形遊び」の変遷」と題して、まず昭和43年版C.S.における遊戯性、昭和43年版から52年版への連続性、大阪Doの会の活動をあげ、初期「造形遊び」の内容を考察した。その後、「新しい学力観」「生きる力」時代の「造形遊び」として、認知心理学の成果と「造形遊び」、「総合的な学習の時間」と「造形遊び」といった観点をあげ、平成元年版、平成10年版C.S.をふまえた総括をした。

宮崎藤吉氏(生駒市立依口小)は、小5年教科書掲載「ここに、マイハウス」を取り上げ、制作場所の確保・材料集めの難しさ、グループ活動・安全面・持続性の難しさなどをあげて、「授業に展開しにくい理由」を述べた。

山口二三八氏(香芝市立香芝西中)は、「中学校と小学校との連携から学ぶこと」と題し、自分が受け持った中1生徒に対するアンケートと校区小学校教師へのインタビューをふまえて、小学校との連携の視点を発表した。



足立元氏(奈良高校)は、「授業実践を通して考える「遊び」の要素」と題し、高校芸術科(美術)での授業実践「風景の中のオブジェ」における生徒の活動をふまえて、考察をした。

休憩の後、永守基樹氏(和歌山大)は、

「21世紀における「造形遊び」の可能性 - アヴァンギャルディズムを超えて」と題し、造形遊びの多義性と混乱を確認した後、「造形遊び」への視座、「近代」と「前衛」をめぐって、メディアという視座、基礎と総合、メディア論的基礎教育としての展開といった観点をもち、発表をした。

指定質問者である吉村茂氏(生駒市立生駒東小)、西久保勝康氏(山辺郡山添中学校長)、市原基一氏(天川村立洞川中)、花篤氏及びフロアからの質問と意見交換をふまえて、参加者全体での討議会を持った。

「功」としては、「関心・意欲・態度など子どもにおける成果/発散・ガス抜きの意味/材料,場所からの発想を中心とした活動・表現分野の広がり/造形言語の獲得・身体化/幼-小連携/集団を活性化/学習者中心の理論に合致/教師の意識改革-材料、場所、身体性への着目/絵画一辺倒、コンクール中心の活動からの脱却/教師の裁量が拡大し、個々の独自性が增大」などが上がった。

「罪」としては、「曖昧な内容で、一般的に理解困難/学生や図画工作を得意としない教師にとって、内容把握が困難/個人の表現欲求が蔑ろ/学校の指導形態にそぐわない面/学年、発達段階を軽視-特に高学年における子ども像が多様でない面/評価規準・基準問題へ対応の拙さ/新しい科目や分野(生活科、総合学習)と類似/パラダイム・チェンジが完成する過渡期を考慮せず、混乱/「絵画」の軽視/美術史からの逸脱/文部・文部科学省行政の齟齬-小中連携の視点の欠如/文部省・文部科学省行政への健全な批判精神の欠如/大学教育の力量不足」などがあがった。

これらをふまえた次なる「教育政策」としては、「小中の共同研究の推進/小中の人事交流の推進/高学年における「総合的な学習の時間」との連携/小学校低学年・中学年までに限定/個人活動に重き

を扱った「造形遊び」の推進/指導書『解説』『展開』などの著作の改革/行政の在り方の改革/指導要領改訂の透明性の確保/小学校全科担当教師に焦点」などがあがった。

また、実際には、様々な理由から、「造形遊び」は、学校現場で、十分に実践されていない状況も浮かび上がってきた。

最後に、岩崎由紀夫氏(西地区会担当理事)が、発表と討議内容をふまえて、「功罪」をまとめ、今後の展開を示唆した。

.....

コーディネーター役としては、「お決まりのいつもの展開」でなく、本音をぶつけ合う討議を創りあげて下さった参加者全員に感謝しています。また、この熱気を活かして、継続して、研究・討議していく必要性を感じました。

なお、研究発表会の「概要集(A4版全82頁)」の残部があります。3月20、21日の学会広島大会会場でも販売予定ですが、郵送希望の方は、以下のものを同封し、送り先住所氏名を明記の上、下記までお申し込み下さい。

- 1, 500円分の図書券(概要集代)
- 2, 290円分の切手(郵送代)

申込先 〒630-8528 奈良市高畑町
奈良教育大学 宇田研究室
udah@nara-edu.ac.jp
* * *

新入会員の紹介

- 尾澤 勇 (広島大学附属小・中学校)
- 蓑岡勇氣 (佐賀大学大学院)
- 佐伯育郎 (広島文教女子大学)
- 樺山真理 (東京工学院専門学校)
- 武田伸吾 (大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校)
- 新島久美 (福島大学大学院)

* * *

美術教育史研究部会

岡山での研究会開催のお知らせテーマ
「学校における美術鑑賞教育とその歴史」

金子一夫(茨城大学)

日程 平成16(2004)年3月18日(木)
17:30 ~ 20:30

会場 岡山国際交流センター
〒700-0026 岡山市奉還町2-1-1
TEL:086-256-2000

JR岡山駅西口を出て徒歩2分
研究発表

- ・赤木里香子「美術科教育は《見る力》をどう捉えてきたか - 戦前 - 」
- ・新井哲夫「美術教育における鑑賞教育の考え方と方法 - 戦後 - 」
- ・金子一夫「学校における美術鑑賞教育の在り方とその歴史的考察」

研究会参加費 500 ~ 1000円の予定
懇親会 研究会終了後 希望者 会場未定

見学会 翌3月19日 9:00 ~
岡山県立美術館(岡山市天神町8-48)
において松原三五郎関係資料の見学

松原三五郎(1864-1946)は、周知のように岡山県師範学校、大阪府師範学校に勤務する傍ら私塾で多くの生徒を教えた図画教育者。松原の教え子には鹿子木孟郎、満谷国四郎、中川八郎、池田逢邨などがいます。

美術教育史部会員以外の参加も歓迎します。会場準備の都合もありますので、出席御希望の方は、できるだけ早く金子へ何らかの方法で連絡して下さい。最も好ましい連絡方法は電子メールで、金子の

自宅メールアドレス、
kazuokaneko@mub.biglobe.ne.jp への送信です。

コーディネーター赤木里香子先生(岡山大)のコメント

歴史研究の視点を活かして鑑賞教育の理論と実践を結びつけることを願いつつ、今年度の研究部会を岡山にて開催する運びとなりました。広島大会の前々日である18日夕刻に研究会、19日午前中に岡山県立美術館の見学会を開きます。午後からは特に行事を予定しておりませんが、同館周辺に日本三大名園の一つ「後楽園」や岡山城、岡山市立オリエント美術館、林原美術館がありますのでゆっくりお楽しみいただければ幸いです。

また、19日を利用して、倉敷市の大原美術館や瀬戸内海に浮かぶベネッセハウス直島コンテンポラリー・アート・ミュージアムなどにも足を伸ばしていただけます。岡山から東広島までは新幹線こだまで約1時間です。この機会にぜひ、岡山にお立ち寄りください。お待ちしております。

宿泊 各自で手配して下さい。

赤木先生からの情報を以下に載せます。国際交流センターに近いのは第一イン岡山：<http://www.daiichihotel-oka.co.jp/>です。「旅の窓口」経由だとシングル4700円か5500円。ただ、東口側のほうが賑やかで新幹線口近く翌日は便利です。5800円と比較的安くて一番駅にも近く、おすすめなのがホテルニューオカヤマ：<http://ww1.tiki.ne.jp/h-newokayama/>です。「旅の窓口」で検索して5000円以下で出るもののうち、便利なのは、岡山ビジネスホテルアネックス：<http://www.obh.co.jp/annex/>、ベネフィットホテル岡山本町、ホテル・マイラといったあたりです。そのほかバス・トイレ共同で2580円からと激安なのが駅前ユニバーサルホテル：<http://www.universal-group.co.jp/>があります。新しくてキレイなのが三井ガーデンホテル<http://>

www.gardenhotels.co.jp/okayama/で、7000円くらいです。

* * *

特集「元気なヒト，げんきな活動」4

土曜日は早起き！

- 学校外・絵画造形教室の活動報告 -

赤座雅子(造形教室講師)

「今日は何すんの？」学校や幼稚園・保育園のない土曜日の朝9時、子ども達は息を弾ませて、こう言いながら教室のドアを開けて入って来る。「オハヨウ」という挨拶の代わりである。3才から小学校4年生までの子ども達が三々五々に集まって来る。

私が運営している絵画造形教室(絵画塾)の始まりの風景である。この教室は、大阪は中心地に近い十三(ジウソウ)地区、活気あふれる商店街の真ん中程に位置するスーパーの2Fホールにある。50坪のスペースに水道が1つ設備されている。10帖大のブルーシートを2枚敷いて、その日の教材を揃えたら絵画造形教室が始動する。

小学校で図画工作科があるにも関わらず教室に通って来る子ども達。学校週5日制が実施されて3年目、マスコミの学力低下論が沈静化したものの、我が子の学力に危機感を抱いている保護者は私の身边にも少なくない。将来に向けて、自分の子どもにどういった学力を身に付けさせ

たら良いのか選択肢の数だけ迷っている。

こうした状況の中、「絵を描く事が好き、上手になりたい。」という従来からのシンプルな動機以上に、学校外の絵画造形教室に求めているものがあると感じる。地域の絵画教室はそれぞれの先生の個性や経営方針で成り立つものであり、その数は全国で数万に及ぶといわれている。わずかな側面ではあるが、私の1教室の事例を通して学校外の絵画造形教室の現在を紹介したい。

子どもと保護者の声

毎週土曜日、朝9時から12時までのこの「キッズ・クラフト・ピュア十三教室」は、生徒数20名余、8つの小学校と4つの幼・保育園の子ども達の集まりである。子ども達は学校の図工科だけでは不足なのだろうか。

「図工の時間は楽しいよ。」殆どの子は訊ねると、こう答える。

「ソーゴーがあると図工がないねん。」

「図工の時間、先生はあんまり教えてくれない。他の事してる。」

描く・作る事をもっとしたい、という意欲的な子ども達である。「学校の評定に関わらず、好きな事をもっと伸ばしてあげたい。」という子どもと同様に意欲的な保護者の声もある。

もう一方で「絵を描くのは好きじゃない。」という子もいる。「描けるようにして欲しい。」と、その目的は個々に違いがあるものの、カウンセリングやセラピーに近い指導を求められる場合もあり、最近では少ないケースではない。

これに加えて軽度障害をもつ子、もしくはその可能性のある子の保護者が「何か身に付けさせたい。」「落ち着きを持たせたい。」と見学に来ることがある。「造形」の文字を看板に入れた教室は、こうした子の入会を望まれる傾向にある事を聞く。

教室の骨組み

絵画造形教室は保護者からの月謝によって経営が成立するものである。入会の際に保護者の要望は聞くが、教室の方

針は必ず理解してもらおう。造形活動を通して子どもを育て、作品の形よりも過程に重点を置いている事、様々な素材を体験させる事等伝える。カリキュラムは、「絵画 工作 造形」とおおまかなローテーションを組んでいる。

「絵画」については年2～3回、児童画展(コンクール)に出品する。「工作」は作ってあそべるおもちゃづくりや、生活を彩るクラフトの制作を試みている。「造形」は目標をあらかじめ定めず、活動過程からつくりあげ、試行錯誤を楽しむあそび性を大切に活動を行っている。

月謝もらって造形あそび？

写真は教室の造形あそびのカリキュラム「ころがるもので遊ぼう」段ボールで簡易なスライダーを設置し、乾電池をころがしてみせる。「もっと面白くならないかな？」と子ども達に問いかける。「思い付いたらやってみてごらん。」と背中を押す。押されなくとも子ども達は本来こうした活動が大好きである。準備したあらゆる道具や素材を使いだす。



発射台やゴールを作る子、落とし穴に工夫を懲らす子、乾電池のデザインに夢中になる子。ちゃっかり「1回10円」の看板を描く子もいる。1時間を経過する頃には立派にあそべるゲーム・センター(!?)になっている。思い付いて、やりたいただけやってみる。自分の手で考え、悩み、選択してつくる。あそぶという行為の

中で思いの表わし方を駆使し経験する。そこから自らの学びをつくりだしていくのである。

私は子どもが行き詰まった時、その子の年齢や個性・発達に応じた援助をしている。サポートをし過ぎない事も同時に心掛けている。作品として残らないため、活動はデジカメで記録し、毎月ごとの通信(おたより)に掲載する。活動のねらいも短い文章で入れる。自宅の冷蔵庫に貼った通信を、教室に来る機会のない家族や友達に、どんなふうを描いたり作ったりしたか、説明をする子もいるそうである。



「大阪市子育て支援活動～親子造形」の様子。作る事を通して、親子と親同士のコミュニケーションを高めようと幼稚園と企画。「造形で子どもを伸ばす！」がサブタイトル。好評につき2年目。

造形活動、この先

前述した造形活動のように、大人からのお仕着せではなく、自らの発想と力で作る楽しさを子どもが感じ始めると、絵画や工作もイメージ豊かに広がりを持つ作品に変化していく。「絵を描く事が苦手」と入会した子が自宅でもひとりで描いたり作ったりするようになったと報告してくれる保護者もいる。

なぜ絵画教室に通うのか、学校という制度に限界を感じているのか、批判的なのか。それも理由に含まれるのかも知れない。私はそうした理由以上に、自分の子どもの新たな可能性を求めて教室の扉を叩いているのではないかと感じている。

塾の過当競争地区といわれる十三地区。小さいながらも絵画造形教室だからこそこできることがある。そして造形活動をより必要とする時代がやってくると私は思っている。

「来週は何すんの？」教室が終わり、帰り際、サヨナラの代わりに挨拶。土曜日は自分から早起きするという子ども達。みんなのヤル気に応えるべく、元気な活動の案を練る。

「それは来てのお楽しみ！」

*今年、第34回世界児童画展にて全国造形教育連盟賞を、この教室の生徒が受賞しました。

*全国の絵画教室の先生たちのネットワーク『Ga-net 画ネット』(代表：栗山誠、事務局：赤座雅子)を立ち上げました。

ホーム・ページでぜひ一度、ご覧下さい
<http://ganet.web.infoseek.co.jp/>

研究紹介 「美術教育と教師」

増田金吾(東京学芸大学)

皆さんは、武井勝雄、倉田三郎、稲村退三、手塚又四郎、阿部広司、長谷川信也、増田喜恵蔵、西田藤次郎、熊本高工、箕田源二郎、山崎幸一郎、海老沢巖夫、根津三郎、日野照夫、稲垣達弥といった方たちをご存じだろうか。これらの人たちは、皆東京府青山師範学校・東京第一師範学校(以下、青山師範学校という。現東京学芸大学)における赤津隆助(1880～1948)の教え子たちである。多感な青春時代に赤津から受けた教育による影響力は小さな

かった、と考える。

それにしても、何故、赤津に教えを受けてこれほど多くの美術教育家が誕生したのだろうか。その教育力に興味を持った。そして、赤津の「指導法」に多くの美術教育家(美術教育家だけではないのだが)を育てる鍵があるのではないかと、それは単に美術教育という範疇にとどまらないもっと大きなもの、すなわち人間教育的なものがあるのではないかと考え、調べてみた。

福島県平町(現いわき市)に生まれた赤津は、もともと絵が好きであった。そして、逆境にもめげずに努力の末、明治35年に東京府師範学校を卒業し、すぐに同校附属小学校訓導となった。その翌年には、文部省主催の講習で図画教授法を白浜徴から指導されるが、赤津は白浜からその後も影響を受け、また信頼されてもいた。そして、明治41年には本校である青山師範学校兼務となり、昭和23年に満67歳で没するまで、同一校で一貫して教師養成に当たった。

赤津が行った図画教育(美術教育)は、次のような方法である。

- 1、授業においては、生徒の自主性や自由を尊重しつつ、生徒とともに教師自身が技を磨く立場をとったこと。
- 2、自身も模写などをしながら腕を磨いていたこと。
- 3、寄宿舎の舎監となり、授業外でも生徒と生活を共にしたこと。教育は生活であると考え、毎日の生活を重視した。生徒の日常生活を重視した上で、彼らの主体性や個性を尊重し、教師は生徒の力を引き出す役目を果たすのである、と考えた。
- 4、自著『小さい影』や在校生主体の青山師範学校校友会機関誌『校友』(編集責任者)などを通じ、影響を与えたこと。
- 5、青山師範学校出身の美術同好者のグループ「青戀社」を結成し、こうした活動の中でも多くの人を育てたこと。彼は、こうした授業以外の様々なこと

にも真剣に取り組んだ。それは、相手を真に理解し、生徒の心、さらには人の心をとらえるのに必要なことであると考えたからだと思われる。

一方、学校外にあっては、新図画教育会の創設に参画し同人となっている。会の中心的人物は谷鎌太郎であるが、谷と赤津の考えはやや異なる。赤津には、心の教育の重視、形や色よりも芸術性の重視が見られる。新図画教育会同人という見方からすれば、赤津も造形主義の美術教育家ととらえられがちだが、そう単純ではない。また、図画科の目的と方法とに関しては、「図画科は、創作と鑑賞とによって、造形芸術陶冶をする教科である」とし、こうした教科は国民普通教育として極めて重要であると主張する。

そして、たとえ、図画科が廃止されたとしても、児童の芸術陶冶すなわち美的陶冶は是非必要で、何らかの時間で行われなければならない重要な教育だと唱える。従来の一一般の教育は、あまりに知的に偏っていた。模倣に傾き、注入に過ぎた。将来の教育は、もっと美的な教育、情操の教育、創作の教育、自発の教育、自由の教育が必要である。それにはこうした図画教育が最も重要な地位を占めなければならない、と説いた。

ここに挙げたように、時間のかかり、労力の要る教育が、結局は人の心を打ち、影響力を持つものとなる。もちろん、その背景に個の尊重と専門性が必要なことは言うまでもない。

求めに応じて、研究の一端を示させて頂いた。

* * *

昨年末に役員選挙が行われました。その結果、以下の方々が新役員に選出されました。任期は3年です。

赤木里香子, 新井哲夫, 岩崎由起夫, 上山浩, 大橋皓也, 岡崎昭夫, 金子一夫, 花篤實, 柴田和豊, 直江俊雄, 仲瀬律久, 長田謙一, 永守基樹, 橋本泰幸, 浜本昌宏, 福本謹一, 藤江充, 前村昇, 増田金吾, 水島尚喜, 宮坂元裕, 宮脇理, 山木朝彦, 山田一美